

I 福山市

ミッション

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

ビジョン

「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

前年度学校関係者評価の主な内容 めざす子ども像の実現に向け、主体的に学ぶ取り組みを着実に進めている。授業では教職員が熱意を持って、工夫をしながら全力で取り組んでいる。学校と地域とが連携した教育活動を共に進めていきたい。	児童生徒の現状 「探究的な学習」の研究を校区で推進している。『子どもの声』から、『本物に触れる』、『机からの脱却』を視点にもった学づくりにより、児童生徒が自ら探究する姿が見えるようになってきた。	育成する力 21世紀型“スキル&倫理観” めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	「学びに向かう力」「課題発見・解決力」「対話する力」「自己・他者理解力」「自己効力感」 自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる力を身に付けている。 小中合同の「自ら考え学ぶ授業」を実践するための研究授業を通して、全ての児童生徒が主体的に学ぶことができる学校をめざす。 探究的な学習の充実に向け、小中で連携して、9年間のカリキュラムを構想するとともに、「子ども主体の課題設定」「机からの脱却」（外部連携を含む）を視点にした取組を行う。
--	--	---	---

III 自 校

ミッション
地域に愛着を持ち、自己を高め、友達とともに伸びていく力を培う

学校教育目標
自ら学び 夢に挑戦

現 状
<児童生徒> 縦割りの班での活動や「夢に挑戦」への取組を通して、児童の「自己効力感」や「自己指導力」につながる意識が、向上してきている。特に「夢や目標をもっている」という質問に、肯定的に回答している児童の割合が増えてきている。しかし、日々の友達との関わりの中で、相手にきつい言動をしてしまったり、お互いに相手の気持ちを考えることができなかったりするなど、相手意識のある行動や言葉がけが難しい児童もいる。より広い視野で、お互いに分かり合うことができるよう、より細やかな支援が必要である。 <授業> 児童が主体的に学びを広げていけるよう、授業改善を進めた結果、「多様な方法で探究することができる」と感じている児童は約85%だった。児童自身が「問い」を見つけ、児童の「知りたい」や「やってみたい」を大切にしたい授業づくりの成果であると言える。今後、より深く学び続ける力を育成していくためには、児童が自分事としてとらえることができる「問い」のある単元づくりを進め、児童に多様な学び方を促し、学びの場を広げていく授業づくりに取り組む必要がある。

育成する力 21世紀型“スキル&倫理観”		学びに向かう力	課題発見・解決力	自己効力感
めざす子ども像	低学年	目標を決め、自らを振り返りながら取り組む。	友だちの考えをしっかりと聞き、自分の考えをもつ。	友だちと関わり合いながら、自分のいいところに気付く。
	高学年	目標を決め、自らを振り返り、次の学びへとつなげていく。	自ら「問い」を見つけ、自分なりの工夫をしながら課題解決をしていく。	自分の良さ、友達の良さに気付く、自分のやりたいことに挑戦する。
研究	テーマ	児童が「問い」を見つけ、多様な方法で探究していく授業の創造		
	内容等	～「本質的な問い」を意識した単元計画の構想を通して～		
めざす授業の姿		・児童自らが「問い」を見つけ、様々な方法で探究していく授業 ・何のために学ぶのか、児童がどんな力を身に付けるのかを明確にした授業 ・どんなことを学んだのか、どんな力が付いたのかを児童が明確に意識し、分かりやすく表現することができる授業		

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立長浜小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る 取組状況	力以 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力以 評価	達成 評価	総合 評価 改善方策	
6	○自ら考え学 ぶ授業の推進	★	継続	○児童が「問い」を 見つけ、多様な方法 で探究していく授 業実践	○身の回りの生活や 経験と関連付けなが ら学ぶことができる カリキュラムを編成し、 単元づくりを行う。	○「多様な方法で学 びを深めたり広げ たりすることができ た」と感じる児童 の割合80%以上 ○学力を伸ばした児 童の割合前年度以上	□「授業では、課題の解決に 向けて、自分で考え、取り組 んでいる。」74.6% □学力を伸ばした児童 国語 62.2% 算数 66.3% (前年度比国語 8.9%減 算数3.6%増)	3	3	○課題解決するための様々 な方法を提示し、児童一人 一人が解決方法を選択・決定 できるようにする。 ○児童が学習を振り返る際、 振り返りを行う場面を見極 め、「何をどのように学ぶか」 を意識するとともに、学習方 法にも着目できるようにす る。	□「授業では、課題の解決に向 けて、自分にあった方法を選 んで取り組んでいる。」84.1% □課題を見つて、解決しようと 学習に取り組んだ児童が中間 より10.4%増	3	4	4	○何のために学ぶのかを明確に した単元づくりを推進するた めの研修を行う。 ○児童が「学びに対する学習方 法が適当だったか」を振り返 るなどして、学びに最適な学 習方法を選択・決定できるよ うにする。
5	○自己指導能 力を育む教育 活動の推進		継続	○自己を認識し、自 分のよさが分かり、 夢や目標を自分で 選ぶことができる 児童の育成	○「夢に挑戦」の取 組を通して、認め合 う集団作りを行う。 ○行事ごとに目標 を設定し、振り返 り、自分でサイクル を回す力をつける。	○「自分には良いと ころがある」「目標や夢 にチャレンジしてい る」と感じる児童の割 合85%以上	□児童アンケートの 結果「自分には良 いところがある」 75.1%、「夢や目標に チャレンジしてい る」88.3%	3	3	○学校行事では、目的を考 えさせ、なりたい自分の姿や 目標をもたせるようにする。ま た、校内発表会では、お互い のよさを手紙に書いて伝え 合うようにする。 ○縦断の班部会では、振り返 りの時間を大切に「今週の MVP」を決めて紹介する。	□児童アンケートの結 果「自分にはよいと ころがある」85.3%、「夢や 目標をチャレンジし ている」87.3%	3	4	3	○「夢に挑戦」の目標達成率を 集計し、すべて達成した児童の 表彰をする。 ○縦断の班部会で毎月「おそ うじマイスター」を決めて、児童 朝会で表彰する。 ○目標設定や振り返りを意識 するために、行事ごとに相学年で 目標設定、振り返りをし、児童 朝会で発表する。
5	○子ども主体 の健康・体力づ くりの推進		継続	○自分の健康・体力 づくりの課題に気 付き、自己目標を決 めて取り組んだり 振り返ったりでき る児童の育成	○メディアとの関 わりを見つめ直し、 自ら改善を進める 児童を育成する。 ○体力テストで課 題になった項目の 改善を図る。	○生活ふり回りカ ードによる個人目 標達成の割合85% 以上 ○体力テストで課 題になった項目の 改善率70%以上	□生活ふり回りカードに よるメディアについ ての個人目標達成の割合8 6.9% ○体力テスト結果より本 年度の課題は、握力、2 0mシャトルラン、50 m走となった。	3	3	○保護者・児童への再度声 かけを行い、メディアの視 聴削減の目標達成を増や す。 ○再取組み課題について、 授業の始めの準備体操を 工夫改善し、課題・活動に あった準備体操を行って いく。	□生活ふり回りカードによ るメディアについての個人目標 達成の割合85%となった。 ○体力テストの再テスト の結果改善率78%を達 成することができた。	4	4	4	○メディアの視聴削減を達成 できた児童の表彰や視聴削減を やるメリットなどのクイズなど の取り組みを委員会を通して行 っていく。 ○体力アップ週間の取り組みを 行い、遊びながら体力アップ できる取り組みを増やしていく。
3	○働き方改革 の推進と教育 の質の向上		継続	○教職員が元気・笑 顔で勤務できる環 境の充実	○一人一人の学校 経営に対する参画 意識の向上を図る。 ○教材研究に専念 できる時間を定期 的に確保する。	○「仕事にやりがい を感じる」、「子どもが 自ら学ぶ授業づく りに充てる時間がある」と 肯定的に回答する教 職員の割合が、90% 以上	□「仕事にやりがいを感じ る」と回答した教職員の 割合100% □「子供が自ら学ぶ授業 づくりに充てる時間がある 」と回答した教職員の 割合・・・100%	3	3	○お互いに支え合う教職員 集団を土台として、一人一人 が組織づくりに参画する。 ○分掌については、個々の進 捗状況を把握しながら組織 的に取り組む。○引き続き、 会議等を見直しを持って計 画的に行い、提案の仕方、工 夫や内容の精選を図って、時 間を短縮することにより業 務改善を行う。	□「仕事にやりがいを感じ る」と回答した教職員の 割合88.9% □「子供が自ら学ぶ授業 づくりに充てる時間がある 」と回答した教職員の 割合100%	4	4	4	○一人一人が、組織の中 での自身の役割を自覚し、連 携を取り合いながら取組 を進める。 ○研修や低中高部会等 を活用し、授業づくりに ついて相談し合い、情報共有 を行う。 ○今後もやるべきことの 全体像を捉え、内容を精選し、 見直しを持って計画的に 行う等、効率化を図ること により業務改善を行う。

[プロセス評価の評価基準]

評価点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

[達成評価の評価基準]

評価点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

[総合評価の評価基準]

評価点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。